

追悼黒子浩先生。「高千穂採集標本」をめぐる謎

保科 英人¹⁾

I. 黒子浩先生逝く

平成 31 年 1 月 22 日午前。元大阪府立大学農学部教授で日本鱗翅界の長老であらせられた黒子浩先生が 95 歳で逝去された。御年齢からして天寿を全うされたわけだが、それでも至極残念でならない。まずは心より御冥福をお祈り申し上げる。故黒子浩先生は蛾の分類学者で顕著な業績をあげられた。保育社『原色日本蛾類図鑑(上)(下)』は先生の研究の集大成の一つである。近年、蛾類の大図鑑がいくつも発刊されたわけだが、かと言って『原色日本蛾類図鑑(上)(下)』の学術的価値が失われたわけではない。今後も蛾屋の必携書の一つとして受け継がれていくだろう。

「世間で一応甲虫屋と目されている筆者は伊藤修四郎先生の教え子でなければ、採集をご一緒した経験もない。先生が現役時代教鞭を執られた大阪府立大学とは何の所縁もない」。これは筆者が書いた 2017 年の本誌 39 巻 2 号の故伊藤修四郎先生への追悼文の一節である(保科, 2017)。そして、この事情は黒子先生にもそっくりあてはまる。本来なら黒子先生は筆者から見て「お会いしたことはないが九大昆虫学教室の偉大な大先輩」に過ぎなかったはずである。しかし、そんな筆者が黒子先生の知遇を得ることができたのは、九州帝國大學附属彦山生物学研究所(現在の九州大学農学部附属彦山生物学実験施設)の実質的設立者で、日本昆虫学会の名誉会員でもあった博物学者高千穂宣麿男爵(1864-1950)の小伝記を書くべく、筆者が英彦山関係者にヒヤリングをしていたことに起因する(注 1)。

ここで簡単に高千穂宣麿を紹介しておく。高千穂は五摂家に次ぐ家柄の公家である徳大寺家の出身。のち英彦山神社(現在の英彦山神宮)宮司家の高千穂家に養子に入り、同神社の宮司となる。明治 17 年に男爵の爵位を授爵。英彦山をフィールドとして鳥獣や昆虫標本を積極的に収集し、関連論文を多数発表した。宮司を辞任後上京し、貴族院議員選挙に 2 回当選。大正末には英彦山に戻り、再び採集三昧の生活を送る。昭和 10 年に英彦山内の私有地と収集した標本を九州帝大に寄贈した。翌年に九州帝大彦山生物学研究所が完成することとなる。

高千穂は戦後ほどなくして死去。高千穂が晩年に口述し江崎が編集した自伝『鶯嶺仙話』(高千穂, 1946)は近代昆虫学史の重要資料である。

黒子先生が彦山生物学研究所の研究嘱託になられたのは昭和 28 年 8 月 1 日(安松・黒子, 1961)。一方、英彦山で余生を送っていた高千穂宣麿が死去したのは昭和 25 年である。しかし、黒子先生は研究嘱託となれる前にも一度くらいは高千穂に会ったことがあるはずだ、と筆者は考え、平成 27 年、何の面識もなかった黒子先生の御自宅に思い切ってお電話を差し上げたのである。もちろんお会いしたこともない長老の先生にいきなり電話など大変無礼であることは重々承知していた。ただ、この頃黒子先生は既にお目を患われ、手紙を読むのが困難になっていたことを筆者は知っており、やむを得ない方法であると己に言い聞かせた。幸い、黒子先生はお気を悪くされることなく、筆者の度重なる電話でのヒヤリングに親切に対応してくれた。また、ご自宅を訪問し、直接話をうかがったこともある。

本稿では、黒子先生から頂戴した、昭和 20～30 年代の彦山生物学研究所やご自身の経験にまつわる貴重な体験談を紹介する。黒子先生の経歴や研究業績の詳細については、大阪府大や鱗翅類の関係者の方の追悼文に譲りたい。ここでは筆者にしか書けない追悼文を載せたいと思う。

当然のことながら、黒子先生がお話しされた、半世紀以上も前の出来事を筆者自身は直接見聞きしたはずもない。また、細かい事柄についても先生のご記憶違いもあるかもしれない。よって、本来なら以下の全ての文の末尾に「～らしい」「～と言う」「～だそうだ」と付けなければならない。ただ、同様の語句の反復は読み手書き手ともに煩わしい。これら伝聞の助動詞の大半は形式上省略されているものと御理解頂きたい。そして、この手の文章の通例に従い、黒子先生以外の登場故人には原則「～先生」などの敬称を付けていないことを御了承願う。

¹⁾ Hideto HOSHINA 福井大学教育学部

II. 黒子先生から見た高千穂宣麿夫人

「黒子先生は高千穂宣麿男爵に会ったことがありますか?」「いや、ないですね」。これは筆者が最初に黒子先生と電話でやり取りした時の最初の会話である。このように筆者のヒヤリング最大の目的は会話開始 10 秒で潰えたわけだが、先生が「しかし、男爵の奥様とは親交を持っていた」と続けられたので、筆者は高千穂夫人が如何なる方であったかを電話にてうかがった。後日聞いたところによれば、黒子先生は終戦直後の高千穂宣麿存命中に英彦山を訪れたが、高千穂はたまたま留守で、結局会えずじまいだったような気がすると言う。

電話を切った後、筆者は何かがおかしいことに気づいた。高千穂宣麿の妻の芳子は旧公家の四辻家（のち室町家）出身の令嬢だが、昭和 16 年に他界しているのだから、黒子先生と会っているはずがないのである。ここで筆者は霞会館華族家系大成編纂委員会編（1996）『平成新修旧華族家系大成』を閲覧してみた。これは旧華族家の家系図で親子・縁組関係や構成家族の生没年が載っている。さらに出版時の家の当主の住所と電話番号までもが掲載され、県立図書館等で不特定多数に閲覧されてしまうと言う、プライバシーもへったくれもない恐ろしい本だ。

この本で旧男爵である高千穂家の家系図を参照すると、謎はすぐに解けた。芳子の生年と宣麿の子息の生年を見ると、子息の何人かは明らかに芳子の実子ではないことが容易に推察できたのである。ざっくばらんに言うに宣麿には正妻以外にも女性が何人かいたわけで、黒子先生が「男爵の奥様」と呼んだ方はそのような女性の 1 人だったわけである。

筆者は高千穂の小伝中で、黒子先生と親交があった高千穂夫人を「後妻的立場の女性」（保科, 2015）などとまどろっこしい表現で呼んだが、ようするにお妾さんである。後日、黒子先生に再度電話した際「あの……こう言う表現をしても良いのかどうか難しいのですが……黒子先生が会われた高千穂宣麿の奥さんと言うのは……正妻ではなくお妾さんですよ?」と遠慮がちにたずねたところ、「うん、うん。そう」とあっさり認められた。

以前に英彦山神宮の所蔵資料を閲覧させていただいた際に、筆者は現在の高千穂家に「高千穂宣麿の伝記を執筆する際に、現在の道徳観念ではあまり名誉ではないこと。例えば女性関係のことを書いてよいか?」と尋ねたところ、「事実は事実として書いていただいて問題ない」と御了承いただいた。保科（2015）では敢えてこの女性の名を記してこなかった。しかし、彼女と親交があった伊藤修四郎先生と黒子浩先生が共に鬼籍に入られた今、もう彼女の名を明かしてよいだろう。全責任は筆者が負う。

彼女の名は徳子と言う。彼女の名はわからない。

伊藤・黒子両先生、そして長く交流があった彦山生物学実験所（彦山生物学研究所の後身）の中條道崇元助教授にうかがっても、宣麿が徳子を正式に籍に入れていたかどうかはわからなかった。伊藤先生は徳子を「奥様」と呼び、黒子・中條両先生は「高千穂さん」と呼んでいた。

徳子が宣麿の子を産んだかどうかについては確証を得られなかった。黒子先生は徳子の家を何度も訪問したことがあるが、「徳子さんにはっきりと聞いたわけではないが、徳子さんには子供はいない。そんな姿を見たことがない」とのことだった。黒子先生自身は徳子に子供がいなかったとの判断に相当自信を持っておられた。

徳子は宣麿死去後も家を与えられ、英彦山に住み続けていた。そして、言わば亡き夫の忘れ形見である彦山生物学研究所に出入りし、黒子先生や研究所にやって来る九大昆虫学教室の学生の面倒を見ていた。森本桂九大名誉教授もその一人で、学生時代に徳子に食事を御馳走になったことがあると言う。

黒子先生の記憶によれば昭和 30 年代には英彦山神社周辺でも人々の服装は洋装が主流となっただけで、徳子はいつも着物で山を歩いていた。厚化粧で実年齢よりも若く見えた。決して派手な着物ではなかったが、颯爽とした歩きぶりが印象に残ったと言う。筆者が黒子先生の御自宅におうかがいした時、横にいた先生の奥様も「うん、うん。徳子さんはほんとに颯爽と歩いておられたよねえ」と回想されたので、よほどきびきびとした方だったのだろう。先生が所持しているアルバムには彦山生物学研究所の入り口前で撮影した記念写真があり、そこに徳子は写っていた。

また、昭和 40 年代に入っても彼女は生物学研究所によく顔をだし、スタッフの面倒をよくみていた。近所で採れたアミガサタケを研究所に届けたりもした。また、研究所で催し物があると皆の世話をし、御田祭では地元の人の輪に飛び込んで踊った事もあった。関係者の記憶からして昭和 40 年代には徳子は老年と呼んでよい年齢に達していたようだから、かなり活動的な女性であったことがわかる。

徳子は体系的に昆虫学を修めていたわけではないが、昆虫にやたらと詳しく、この年代の女性で昆虫に通じていると言うのは稀有に近い事例と思われる。彼女は虫関係でも高千穂宣麿の良きパートナーとなり得たのだろう。彼女は宣麿と知り合ってから虫の知識を蓄えたのか、もしくは元々虫好きだったから宣麿のお眼鏡にかなったのか、今となっては詮索不可能であるが、興味を惹かれるところである。戦前から戦後にかけて研究所に小使いとして勤務していた広津一松氏は英彦山で狩猟をし、同山の自然に精通はしていたが、昆虫に対して特別な知識はなかった。そこで黒子先生の昆虫談義の相手は彼女が務めたと言う。虫談義どころか、先生の採集に同

行したこともある。先生の印象では、徳子は記憶力に優れ、頭脳明晰だったそうだから、単に美貌だけで高千穂に見込まれたと言うわけではないだろう。

ただ、徳子は記憶力抜群であったとは言え、昔話を好むタイプではなかったらしい。よって、徳子から黒子先生を経た高千穂宣麿の思い出話は残念ながら後世に伝わることはなかった。その代わりと言ってはなんだが、黒子先生は九大昆虫学教室第2代教授の安松京三の高千穂評を覚えておられた。安松は「高千穂男爵はすぐに新種だ、新記録だ〜と騒ぐけど、そんなものは論文にして初めて言えることだ。あれはバカ殿だよ」と酷評していたと言う。高千穂の生涯の言動を眺めると、彼は良く言えば無邪気、悪く言えば幼稚な「とっつあん坊や」だったことがわかる。面白い虫を捕れば「大発見だ!」とはしゃいでしまう性質があった。安松の高千穂評は当たらずとも遠からずと言ったところか。

なお、九大昆虫学教室初代教授江崎悌三及びシャルロツテ夫人は、高千穂宣麿・徳子夫妻と親しい付き合いがあった(保科, 2015)。しかし、少なくとも黒子先生自身は、戦後に江崎やシャルロツテ夫人が徳子と会っている場面には出くわしたことがない。

黒子先生が英彦山を去る時が決まった時、地元の人が老舗旅館の白梅旅館で歓送会を開いてくれた。徳子もこの会に来てくれたのではないかとのこと。もっとも、先生が大阪に移転されて以降もしばらく徳子との年賀状のやり取りは続いたが、ある時点で音信がぷつぷつ途絶えてしまい、結局徳子その後どうなったか先生は存じ上げなかった。実は、筆者が別の方に聞いたところによると、徳子は晩年認知症を患ってしまったらしい。黒子先生との音信が急に途絶えたのも納得がいく。筆者が恐る恐るその事実を先生に伝えたところ、「詮索はしなかったが、そんなことだろうと思っていた」とこぼされた。

さて、徳子は高千穂宣麿の子を宿したのかどうかとか、晩年はどうであったのかとか、筆者は随分と故人のプライバシーを嗅ぎまわったものだ。「お前は虫屋よりも週刊誌の記者に向いている」と言われても「ぐう」の音も出ないし、実際その自覚はある。なぜ、筆者は徳子のことがそんなに気になるのか?それは、小伝記を書いた筆者が高千穂宣麿最員の傾向があるのは確かだが、それ以上に徳子さん最員だからである。

中條元助教授によると、徳子は正妻ではないとは言え身分高き人の身内だったし、またその他の理由で地元の人には彼女から一步距離を置いているような印象を受けたと言う。黒子先生は高千穂宣麿の長子で後継ぎの宮司の俊麿と面識があった。黒子先生からは徳子と俊麿はいがみ合っていたわけではないが、仲が良かったわけでもないように見えた。この他、徳子は宣麿死去後、村民から何となく浮いていた、との別の方の証言もある。伊藤・

黒子両先生の御記憶から、徳子が地元英彦山出身であったことは間違いなさそうだ。となると、宣麿死去後、徳子には英彦山を去るあてはなく、同地に残るしか選択肢はなかったのかもしれない。

周囲と疎遠気味であった徳子にとって、亡き宣麿が残した生物学研究所は数少ない心の拠り所の一つではなかったか。徳子に偏見を持たない九大昆虫学教室関係者との交流は彼女にとって心休まる一時ではなかったか。それ故に、徳子は研究所に出入りし、昆虫学教室の学生たちの面倒を見たのではないのか。これ全て筆者の憶測にすぎないわけだが、「徳子さんの自宅は湿気が酷く床がひどく痛んでいた」との黒子先生の回想談を合わせると、やはり筆者は徳子に深い同情を禁じ得ない。彼女が宣麿の子を宿したか否かを筆者が知りたかったのは、もし御子息が存命なら、何とか探し出して母親の思い出話を聞きたかったからである。

徳子が九大昆虫学教室関係者を特別視していたと思われるフシがある。黒子先生によれば、九大理学部の教員や生徒が動物類調査のために英彦山の研究所に来ることがしばしばあったが、徳子は出しゃばらず研究所には絶対に顔を出さなかったそうである。彼女が世話をするのはあくまで亡き宣麿と親しかった江崎悌三の門下生だけであった。

正確な名字すら伝わっていない虫好きおばさんの高千穂宣麿夫人徳子。しかし、九大昆虫学教室としては彼女の存在を決して忘れてはならず、後世に語り継がねばならない。それが同教室の末端に繋がる筆者の思いである。

III. "T. Takachiho leg." とのラベルを持つ剥製標本の採集者は誰か?

現在の九州大学農学部附属彦山生物学実験施設に所蔵されている鳥獣剥製標本にはいくつかの謎がある。一つ目は高千穂宣麿の自伝『鶯嶺仙話』によれば、高千穂は収集した標本を彦山生物学研究所に寄贈したとあるが、現在の実験施設で保管されている鳥獣剥製標本の数は決して多くないこと。高千穂は弱冠 23 歳で無免許狩猟をやらかし、また禁猟区で銃をぶっ放したこともある大の狩猟好きである(保科, 2016)。その高千穂が寄贈したと言う割には残されている剥製標本の数が不自然に少なすぎると思えるのだ。筆者は伊藤修四郎・黒子浩両先生に「カビが生えた、虫に食われた等の理由で鳥獣剥製を廃棄したことはあるか?または、福岡市内の九大箱崎キャンパスに剥製を移送したことはあるか?」と尋ねたが、両先生とも「そのような記憶なし」との回答であった。

二つ目の謎は「T. Takachiho leg.」と記された剥製標本の採集者についてである。実験施設には昭和 24 年に捕獲されたキュウシュウモグラやキツネの剥製標本



写真1 キツネの剥製標本 (九州大学農学部附属彦山生物学実験施設所蔵).



写真2 キツネの剥製標本のラベル.

がある (写真 1). そして, データラベルをみると「T. Takachiho leg.」と採集者が記されている (写真 2). 筆者は, 高千穂宣麿の長子の俊麿が採集者であると推測した. その理由は以下の通りだ.

1) 鳥類学者の黒田長禮は著書の中で「当時英彦山神社の宮司であった高千穂氏に会って, キュウシュウモモンガの写真を見せてもらった. 高千穂氏はタカチホヘビやヤイロチョウの発見に尽力された方で, 動物に一方ならぬ興味を持っておられた」と年代不明ながら英彦山に関する思い出を語っている (黒田, 1958).

2) 英彦山神社に残る『社務日誌』の記録や黒田が動物学雑誌に発表した論文の記述から, 黒田の (1) の回想は彼が大正 7 年 9 月初旬に英彦山神社を訪問した時のものと思われる.

3) 高千穂宣麿は明治 40 年に宮司を辞職し, 長子の俊麿にその地位を譲っていたことに加え, 大正 7 年 9 月時点では東京にいたことはほぼ間違いない.

4) つまり, 大正 7 年に黒田が英彦山神社で会った「動物に大変興味がある」高千穂宮司とは宣麿ではなく俊麿である.

5) タカチホヘビやヤイロチョウの発見に尽力したのは, 明らかに俊麿の父の宣麿であるが, この点は黒田が勘違いをしているのではないか.

以上, (1) ~ (5) より, 高千穂俊麿は父の宣麿ほどでないにせよ, 哺乳類に関心があった. よって, 筆者は彦山生物学実験施設のキツネ剥製の採集者の T. Takachiho とは高千穂俊麿である, との結論を導き出した (保科, 2015).

しかし, この結論を黒子先生にお話ししたところ, 「T. Takachiho とは高千穂宣麿夫人の徳子さんに違いない」と即座に否定されてしまった. その根拠は「高千穂俊麿氏が狩猟を嗜んだなどと聞いたことがない. よって『T.』とは動物好きの徳子さんのことだろう」と言われるので

ある. 筆者は「モグラ程度であれば, 徳子さんが道端で偶然死体を拾って研究所に届けた可能性はあろう. しかし, 女性がキツネを捕獲したなどありえるだろうか」と反論したが, 黒子先生は「徳子さん自身が撃ったのではなくとも, 彼女は猟師の方々と付き合いがあったから, そのついでで死骸を入手したとも考えられる」と最後まで納得されなかった.

結局, 筆者はここで先生との「剥製ラベルの T. Takachiho とは一体誰か?」論争を打ち切った. もちろん, 筆者としては今も「高千穂俊麿説」を推しているわけだが, 何と言っても黒子先生は高千穂俊麿と徳子両氏に直接面識がある. それどころか徳子とは相当親しかったことは前章で述べた通りだ. したがって, 「お前は高千穂俊麿氏と徳子さん両名に会ったことがあるのか? あるはずもないお前の言説よりも, 黒子先生の推察の方が正しいに決まっている」と言われると, 筆者としては返す言葉がない. それならば, 小説家的空想を發揮して「高千穂宣麿の正妻ではなかった徳子には動物学に相応の知識があった. そこでせめて動物学上の価値がある標本ラベルの中だけでも『高千穂徳子』と堂々と名乗りたかったのだ」としておけば, 何かしらの浪漫を感じさせるイイ話となる.

さてさて「高千穂採集」と明記された剥製標本の謎. 現在も彦山生物学実験施設にひっそりと残るラベルに書かれた「T. Takachiho」とは一体誰なのであろうか?

IV. 英彦山雑話

黒子先生は九大卒業後, 約 2 年間無給の副手をされ, その後東京で高校教師をされた. そして, 安松京三の世話で彦山生物学研究所勤務となった. 英彦山には 12 年間もおられたと言う. 先生からは英彦山勤務時代の貴重な話をいくつかうかがったので, 以下に紹介しておく.

研究所職員の日課の一つが日誌の記載である. 安松が研究所の日誌に残した絵や記述は大変面白かったし, 学術的にも重要な事柄が含まれていた. 黒子先生は日誌

を書くのが苦手であったが、あまりに単調な日々が続く山の上での生活に「これでは学問的にダメになる」と危機感を抱いた。そこで、何かしらの気付いたことを必死に日誌に記すようにした。ただ、黒子先生は安松記述の日誌は面白いと言っていたくせに、自身が書いたことは殆ど覚えておられなかった。かろうじて先生の記憶に残っているのは、研究所小遣いの広津一松の息子が英彦山神社近くで人魂を見た、と日誌に書いたぐらいである。残念なことに研究所の日誌は現在行方不明となっているが、先生の記憶が正しければどこかの頁に「人魂現れりと聞く」と記述されているはずである。

研究所保管の昆虫標本管理も職務の一つであった。先生は英彦山の研究所は湿度が高く、そもそも標本保管場所として向いていないことにすぐに気付いた。初代教授の江崎梯三が研究所のこの致命的弱点をどこまで深刻にとらえていたかは定かでない。もっとも、研究所の土地は高千穂宣麿から寄贈を受けたものであり、江崎側に建設場所の選択権があったわけではない。江崎はその点については目をつぶったのであろうか。

黒子先生は研究所の標本箱から重要と思われる標本をより分け、昆虫学教室の学生が研究所に来るたびに少しずつ持って帰らせた。また、箱崎キャンパスに所用がある時は、自身で重要標本を運んだ。このようにして山から降ろされた標本は今も九大にあるはずだ、とのこと。

かつて英彦山は冬になると、積雪量が豊富であった。九大昆虫学教室の学生がスキーをしに山に遊びに来ることもあったし、先生自身もスキーを嗜んだ。豪雪で町と山の上を結ぶバスが止まると、スキー板を用意し、滑って山のふもとまで買い物に出かけた。筆者が「町からの帰りはスキー板を担いで山を登ったのか」と突っ込んだところ、町でぶらぶら買い物をしているうちにバスは復旧するものらしく、「行きはよいよい帰りはゼゼゼ」との事態にはならなかったそうだ。

ある日のこと。地元のテレビ局が“ブッポウソウ”と鳴く鳥の撮影と録音に英彦山にやって来た。この鳥は言うまでもなくコノハズクのことである。黒子先生の立会のもと、テレビ局スタッフは英彦山山頂付近まで登るも、結局撮影と録音に失敗した。そこでやむなく、地元英彦山の鳥の鳴き声の物まね名人が草むらでコノハズクの鳴きまねをして、やらせの撮影をしたそうだ。もっとも、いくら物まねがうまいと言っても迫力に限界がある。このやらせが実際に放送されたか否かは黒子先生はご存じなかった。それにしても、テレビ局のやらせ体質は昭和も平成も何も変わっていない。嫌な話である。

V. 大東亜戦争中及び敗戦直後の黒子浩先生

筆者が岸和田市の黒子先生の御自宅マンションを訪問したのは平成 28 年 2 月 11 日である。この時点で筆

者は既に高千穂宣麿の小伝記を出版し(保科, 2015)、高千穂研究に一応の区切りをつけていた。それでも II 章で述べた徳子さんの話を先生に直接会ってもっと聞きたいと思っていたし、またこの際先生の戦争体験もうかがってみようと思ひ、御自宅を訪ねた。当日は先生ご自身のことをあまりに根掘り葉掘り聞いたので、「君は僕の伝記でも書くつもりか？」と笑われた。

黒子先生自身、己の戦争体験に関する回想談を残されている(黒子, 1985)(注 2)。そこから筆者が先生から直接話を聞くまでにさらに 30 年経過している。筆者訪問時には平成 28 年から計算して、70 年以上も前の戦争体験を話すわけだから、当然先生の御記憶の混乱もあっただろう。ただ、筆者がうかがった話には黒子(1985)には書かれていないものも多数含まれる。以下は、今や数少なくなった戦争の語り部としての先生の遺言である。なお、先生の話の内容を戦史資料等で裏を取るところまではしておらず、したがって先生のお話をそのまま記しただけである点は御了承願いたい。

黒子先生は大正 12 年生まれ。昭和 18 年の学徒出陣で陸軍に入隊し、習志野で訓練を受けた。訓練中一時帰宅を許されたが、たまたま東京へ空襲があり鉄道の運行が乱れ、帰隊が遅れてしまった。そのため大変怒られたと言う。この手の話はよそでも聞いたことがある。空襲は兵士側の責任では全くないのに、上官から叱咤されるとは理不尽この上ない話だ。

先生は、昭和 20 年南方に向かう部隊に配属され、出征することとなる。黒子(1985)に従えば、同年 1 月 31 日に門司港を発った。内地では日本軍の状況について威勢の良い話を聞かされていたが、船の中で初めて日本軍の惨状を知ることができた。死を覚悟したのは、むしろこの南方へ向かう船の中だったらしい。この辺りのお話はおよそ黒子(1985)と一致している。

幸い敵に撃沈されることなく部隊は昭南島(シンガポール)に到着した。現地では、最初はレーダー兵器、次に高射砲部隊に配属となった。その後、シンガポールからタイ、ブノンペン、サイゴン、タイと転戦し、そしてこのタイの飛行場近くで終戦を迎えられたと言う。黒子(1985)の体験談には、ご自身が入った戦地としてベトナムやサイゴンとの地名が一切出てこない。ただ、筆者には「サイゴンでは我が軍の高射砲部隊が米軍 B29 を撃墜し、地元の住民が『すごい戦果だ』と感心していたと味方から聞いた」と回想された。先生の記憶違いでなければ、どこかの時点でサイゴンに入られたのであろう。

幸いなことに先生が所属する部隊は南方滞在中に敵と戦闘状態に入ることはなかった。よって、先生は敵と直接撃ち合う厳密な意味での実戦を経験しなかったと言う。

所属部隊の食いはインディカ米だった。確かにうま味はないけれど、特に不満もなかった。そもそも不満

を言える時代ではなかった。一方、コメに添える漬物がパイアの漬物ぐらいしかなく、これは不味かったそうだ。何はともあれ、所属部隊は戦闘に入ることなく、従って敵中で孤立することもなかったの、南方出征中先生はあまりひもじい思いをせずにすんだ。

タイで終戦を迎えられた先生は玉音放送を直接聞いてはおらず、部隊内の情報で祖国の無条件降伏を知った。タイは大東亜戦争中独立を保ち、日本の同盟国であった。しかし、戦局が日本に不利になってくるとタイ軍は次第に敵意を現し、両軍の部隊が睨み合うような場所もあった。そして日本の敗戦が知れ渡ると、タイ人の対日態度はさらに硬化した。終戦後、日本軍は武装解除となったわけだが、その武器の保管場所に現地のタイ人が頻りに盗みにやってきた。一応日本側は見張りに立っていたが、武装解除されているので武器は小銃1丁ぐらいしかない。逆に強盗は十分武装しているばかりか、機関銃を手にしていることすらあった。日本軍側は抵抗することもできず、結局なすがままに強盗にやられた。飯ごうや小銃、ありとあらゆるものが持っていかれてしまった。終戦直後のタイ人のこの略奪ぶりについては、黒子(1985)でも述べられている。

戦争中、先生は見習士官であった。しかし、終戦直後に部隊管理に必要だろうとの上層部の判断で、終戦直後に正式に少尉となった。これを「ポツダム少尉」と呼ぶらしい。

いざ敗戦となり、先生は「日本は今後どうなるか」「死なずにすんでほっとした」との感情よりも、むしろその後予想される捕虜生活に不安が押し寄せてきた。日本軍捕虜の管理に当たったのはオーストラリア軍であったが、そのオーストラリア軍は厳しいと聞いていたのでそれが大変心配だった。しかし、捕虜生活が始まってみると、オーストラリア軍は意外と友好的だったと言う。

捕虜生活は自給自足の農業が日々の中心だったが、時々使役として便所などを作らされた。日本軍の部隊は色んな職種の間で構成されていた。捕虜の中には入隊前は元大工の兵士がいたせいであろうか、便所や家なども簡単に建ったそうである。

捕虜生活はたいして長くなく、マラリアにやられることも免れた。そして、オーストラリア軍にはそこそこ丁寧に扱われ、捕虜収容所には食い物もある。捕虜生活は辛苦に耐えたというほどでもなかった。

ただ、復員の際、収容所から港に向かわねばならなくなりましたが、港までの運搬手段がない。そのため、40 km歩かされたのが辛かった(注、黒子(1985)によれば行軍距離百キロとある)。途中でへばってしまう戦友もいた。何とかたどり着いたタイの港から小さい船に乗せられ、どこかで大型船に乗り換えさせられ、東京に何とか戻ってきたのは昭和21年6月である。復員船は

ぎゅうぎゅうで寿司づめ状態、というほどでもなかった。ただ、船内はガソリン臭く、油断をすると酷く船酔いをした。よくは覚えていないが、タイを出てから日本までの船旅は20日ぐらいたったような気がすると言う。

先生は九死に一生を得て無事帰国されたわけだが、やはり心配になったのは国家の行く末などではなく、横浜の御自宅のことであった。自宅は屋根に焼夷弾があたり半分焼けたが、逆に言えば半分残ったので、寝泊りは何とかできたことが幸いした。自分が戦後九大に復学できたのも、家が完全に失われずにすんだからであると述懐されている。

終戦後の捕虜生活については黒子(1985)で殆ど言及されていないので、これだけでも本稿に書く価値は十分である。しかし、さらに2つ貴重なお話をうかがえたので、それを書き記すこととしたい。一つ目は辻政信の件。捕虜収容所時代、参謀の辻政信大佐が近々部隊の見回りに来るとの話が伝わり、部隊内に大きな緊張が走り、隊内はピシッとなったと言う。

黒子先生は最初から筆者に対し、辻の名前を出されたわけではない。「え〜と。戦後国会議員になった参謀が収容所に来て・・・え〜と誰だったかなあ・・・?」と考え込まれたので、筆者が即座に「辻政信ではないですか?」と申し上げたところ、「そうそう、その人」と言われた。

辻政信(1902-1968)と言えば、昭和期の戦史に多少知識がある者なら、必ず名前を知っている。辻はノモンハン事件、シンガポール攻略戦、ガダルカナル島の戦いなどの有名な戦場で参謀として作戦を指導した。辻は作戦の神様との評価もある一方で、ノモンハンで大敗北を喫したにもかかわらず、一切責任を取らなかった厚顔無恥ぶりを徹底批判されることもある。良くも悪くも昭和陸軍史の最重要参謀の1人だ。

先生は「自分は捕虜収容所で辻に会っていないが、辻は実際に収容所に来たはずだ」と言われた。終戦前後に辻がタイにいたのは事実である。しかし、辻が終戦直後の逃避行を自身で記した武勇伝『潜行三千里』には、彼が捕虜収容所に見回りに行ったなど一言も書かれていない(辻, 2008)。筆者は別に昭和陸軍史の専門家でも何でもないので迂闊なことは書けないが、果たしてこの時期に辻が捕虜収容所に来ることはあり得たのか?

辻は敗戦直後、部隊を離れ青木憲信との偽名で僧の姿となってタイ国内に潜伏した。辻の潜行目的が何だったかについては「あまり明確でない」(秦, 1982)、「戦犯指名を怖れた」(児島, 1975; 橋本, 1995)と専門家の間でも意見の一致を見ていないようだが、辻がタイ国内を連合軍から逃げ回っていたことは確かだ。となると、そのような状況下で辻が連合軍管理下の収容所にノコノコと顔を出すなどと考えられるものなのか? 辻に関す

る関連資料は多いので、しっかりと文献を漁れば白黒は付きそうな気がするが、現時点では「わからない」としか言いようがない。

ただ、辻が捕虜収容所に来るとの噂が部隊内に広まったこと、そしてその噂により終戦で緩みがちだった軍紀が急に戻った、との点は非常に面白い(注3)。一体どのような経緯で噂が捕虜収容所に伝わったのだろうか？また、敗戦となっても衰えぬ辻政信の神通力にはあらためて驚かされる。

二つ目の貴重な先生の回顧談は復員船の中でのことだ。帰国の航行中、船内では船が台湾の岬のガランピ灯台付近を何時何分に通り過ぎるかを当てる懸賞大会があった。先生はピタシカンカンではなかったが、今言うニアピン賞を獲得し、風呂(入浴権)が当たった。ちなみに風呂は3位の賞品で、1位は握り飯、2位はタバコだったと言う。お握りとはコンビニで百円で買うもの。筆者はいかに自分が飽食の時代に生まれたのかを思い知らされ、ただただ黙するばかりであった。

VI. 趣味はコント？

平成28年2月に先生宅を訪問する際のこと。筆者は「御自宅のマンションの位置は地図で調べたから、直接おうかがいする」と申し上げたにもかかわらず、「いや、東岸和田の駅から電話してくれ。白い杖を持ったのが私です」と言われ、結局駅まで迎えに来てもらった。なお、この白い杖は他人に目が不自由なことを知らしめるためのもので、歩くために使うのではないとのことだった。実際、この頃足腰はお元気そうで、杖を完全に持ち上げられて歩いておられた。不思議な光景ではある。

御自宅では「あなたは高千穂男爵のことをペーパーにするのか？」と先生に聞かれた。そこで「既にペーパーにしています。しかし、黒子先生はお目が不自由ということで、本日はあえて持参しておりません。後日、別刷りをお送りした方がよろしいでしょうか？」と聞くと、「いや、いい」と断られたので高千穂宣麿の小伝記は結局お送りしないままである。

先生は目がお悪いと言う割には、筆者には問題なくお茶を飲んだりまんじゅうを食べたりされているように見えた。ただ、必要なものを探す時は手探りで見つけ出しているとのことだった。実際、黒子先生はご自身の業績を説明される際、製本2冊分の論文集を手探りで探すも結局見つけ出せず、筆者が本棚より出させていただいた。

当たり前だが、目が不自由であれば顕微鏡を覗くことは無理である。そこで筆者は「昆虫にまつわる講演活動はされないのでしょうか？」と聞いたところ「目が悪いと最新の知見が入手できないので無理である」と即答された。「でも、一般市民向けの初歩的な講演ならでき

るのではないのでしょうか？」と重ねて聞いたところ、「講演は相手の顔を見ながらでないといけない」と言われた。先生なりの大きなこだわりがあるのだろう。頼まれれば渋々講演はするけれど、聴衆が理解してようがしてなからうが知ったこっちゃねー、とりあえず義務を果たせばエエんやろ、との横着者の筆者と黒子先生とでは何かが根本的に異なるようである。

黒子浩は最晩年に出版された『Insect of Japan. Vol. 5』(2015)で新種記載もされている。黒子先生曰く「最年長者による新種記載ではないだろうか」と多少自慢げであった。もっとも「人間は70歳ぐらいになったらとつと死ぬべきだ」とも呟いておられた。先生も人の子。己の死生観がその時々で揺らいでも不思議ではない。なお、お弟子さんたち(大阪府大関係者か?)が『Insect of Japan. Vol. 5』の出版祝いをしようと申し出たが、「この目で外に出るのは危険だ。君たちの声を聴くだけで十分」と断られたと言う。

この頃の黒子先生は1日に2回ほどマンションの周りをぐるっと散歩されるのが日課であった。また、テレビを視聴してはいるが殆ど見えないので、もっぱら聞いているだけだった。そのような中、先生は「近頃の楽しみはコントだ」と言われた。筆者は「えっ？」と一瞬耳を疑った。テレビ画像は殆ど見えないとうかがった直後だったし、さらに目の不自由な先生がまさか台本を書くとも思えない。よく聞いてみると、どうやらテレビを聞きながらコントらしきものを考え、自分で口に出す程度のものらしい。ただ、御自宅マンションのこの年の新年会で乾杯の音頭を取らされた時、取っておきのコントを実践された。披露したのは「日本語の乾杯は中国語ではカンペー。間寛平です」とのコントだったそうだ。スイマセン、黒子先生。率直なところ、猛烈に下らな、もとい微妙でござりまする……。



写真3 筆者が黒子先生から頂いた『増補英彦山』(葦書房)と地図入れ。

この訪問時に黒子先生は「もはや自分には不要だから」と、御自身が分担執筆された『増補英彦山』の分厚い本と、透明の地図入れをくださった(写真3)。本はともかく、正直なところ地図入れなんぞ貰っても使い道はないのだが、今後も大事に保管させていただくこととなる。

筆者には自責の念に駆られていることがある。先生に「あなたの専門の分類群は？」と聞かれ「土壌性ハネカクシ上科の分類です」と答えた。すると先生は「その虫の何が面白いのか？」と畳みかけてこられた。筆者は困ってしまった。実は、黒子先生の御自宅を訪問する際「これを聞こう、あれも聞こう」とこちらから質問することばかり考え、逆に先生から何かを問われることを全く想定していなかったからである。先生のこの質問に対する回答は、「特に面白くありません。修士入学時に森本桂先生にこの分類群をやれと言われたから、今も惰性でやっているだけです」が正しいのであるが、もちろんそんな率直な本音を先生に返すわけにはいかない。やむなく筆者は「複眼と後翅を欠くグループは左右の上翅を完全に融合させていること。一方、後翅が無くとも複眼を持つグループは、左右の上翅が融合していない点が興味深いです」とよそ向けの模範解答を述べたが、先生は興味津々のようだった。

しかし、先生は筆者の回答と御自分の目の不自由さとつなげられ、「生き物は不必要なものを捨て去る方向に行く。自分も目を悪くして、行動範囲が極端に狭くなったし、本や顕微鏡を手放した。君が研究している複眼を欠く虫と同じだな」と述懐された。御自分で御自分を笑い飛ばされたような言い方で決して暗かったわけではないが、黒子先生の心中はいかがなものであっただろう。それはご本人のみぞ知ることである。

この時筆者は「しまった!!」と冷や汗を流した。虫屋が視力をほぼ失うというのは大変辛いことに違いない。目の不自由な先生に対し、「複眼がない虫に興味がある」と答えてしまったのは不適切極まりないが、全て後の祭りであった。これだけは誠に申し訳なく、悔やんでも悔やみきれない。

筆者が帰る際も、先生はマンションのすぐ下まで送ってくださった(結構です、とお断り申し上げたのだが)。そして、そこで握手をしてお別れした。先生は「かつては東岸和田駅の近くはカエルや虫の声が聞こえたが、近年は開発が進んで、この手の生き物の声が聞けない。大変残念だ」とこぼされていた。

筆者が先生の御自宅を出る寸前、先生はあらためて筆者の名前をたずねられた。黒子先生はマジックで紙に「保科英人」と書いた。目が殆ど見えないとは言われるけれど、達筆であらせられると思った。この紙は今も先生宅にあるのであろうか？

VII. 謝辞

故黒子浩先生の命日をご教示くださり、また関連文献の手配していただいた大阪府立大学卒業生の澤田義弘博士に厚く御礼申し上げる。また、英彦山神宮の貴重資料の閲覧を許可してくださった同神宮の高千穂秀敏宮司にも深謝申し上げます。

VIII. 注釈

(注1)「彦山」「英彦山」とも読みは「ひこさん」である。名称として古いのは「彦山」であるが、江戸中期に「英彦山」となり、以降「英彦山」の3文字表記の方が一般的となった。もっとも、JR九州の彦山駅や日田彦山線、九州大学農学部附属彦山生物学実験所など、現在でも「彦山」の表記は残っている。本稿では表記を厳密に統一せず、事例に応じて使い分けた。

注2) 筆者は黒子先生に「ご自身の戦争体験を文章にしたことはあるか？」と聞くのを忘れた。もしかしたら、筆者が目を通した黒子(1985)以外にも、先生は戦争体験談を残されており、内容は本稿と著しく被っているかもしれない。その場合はご容赦いただくとともに、筆者にその旨ご教示いただければ幸いである。

注3) 辻(2008)によれば、辻が僧に化けて部隊を離れたことは、すぐにタイ在留民間日本人にも漏れ伝わっていた。噂とは案外簡単に広まるものなのか。そして、辻の潜行の噂が捕虜収容所訪問と形を変えて黒子先生たちに情報が伝わった可能性を考慮すべきなのか。

IX. 引用文献

- 橋本光弘, 1995. 辻政信. 奇行参謀の不思議な行動. p. 162. 椎野八束編, 別冊歴史読本特別増刊. 日本陸海軍名将名参謀総覧. 新人物往来社. 259 pp.
- 秦郁彦, 1982. 昭和史の軍人たち. 文藝春秋. 341 pp.
- 保科英人, 2015. 博物学者高千穂宣磨先生小傳. 日本海地域の自然と環境, (22): 133-223.
- 保科英人, 2016. 若人に託した科学一等國の夢〜昆虫男爵高千穂宣磨の生涯. きべりはむし, 38 (2): 38-47.
- 保科英人, 2017. 追悼伊藤修四郎先生. 高千穂宣磨最後の知己. きべりはむし, 39 (2): 53-57.
- 霞会館華族家系大成編纂委員会編, 1996. 平成新修旧華族家系大成. 下巻. 吉川弘文館. 867 pp.
- 児島襄, 1975. 参謀(上). 文藝春秋. 218 pp.
- 黒田長禮, 1958. 旅と鳥. 鳥とともに六十年. 法政大学出版社. 221 pp.
- 黒子浩, 1985. わが人生への挿入句. p. 62-63. 大阪府立大学教職員の戦争体験を記録する会編, 大阪府立大学教員の綴る私の戦争体験. 大阪府立大学教職員の

戦争体験を記録する会 . 83 pp.

高千穂宣磨, 1946. 鶯嶺仙話 . 九州帝國大學附属彦山生物學研究所 . 130 pp.

辻政信, 2008. 潜行三千里 . 毎日ワンス . 284 pp.

安松京三・黒子浩共編, 1961. 九州大学農学部附属彦山生物学研究所要覧 (第三版) . 九州大学農学部附属彦山生物学研究所 . 55 pp.